Ⅲ　大極殿後殿の調査（132次）

第132次の調査は平城宮の大極殿後殿とそれにとりつく回廊の発掘調査で、発掘面積は2,550㎡、調査期間は昭和56年6月22日から9月29日までである。

調査地は推定第2次大極殿地域の北部にあたり、東西約15ｍ、西北約8ｍ、高さ約1ｍの小土壇が残り、後殿基壇の一部と考えられていた。大正13年、内裏・大極殿一帯の保存工事に際し、東回廊の雨落溝が検出され、また、当研究所が昭和30年に行なった第1次の発掘調査で、回廊東南隅の規模・構造が明らかになった。さらに、昭和53年の第113次調査で大極殿の規模や下層遺構の存在が確認され、調査地北側及び東側の内裏地区も昭和29年以来数次にわたる調査でほぼその概要が判明している。

今回の調査では、大極殿後殿と回廊の規模・構造が明らかになるとともに、大極殿下層の掘立柱建物と同時期の掘立柱建物及び塀を検出し、大極殿地区の歴史的変遷を考察する上での重要な知見を得ることができた。

遺　構

調査地の土層は、整備事業による盛土が最大50㎝程あり、その下に旧耕土・床土が20～40㎝ある。床土の下で奈良時代の遺構を検出した。調査地の地山は黄褐色粘質土（部分的に小礫を含む）で、この地山の上を小礫混りの黄褐色ないし灰褐色の土で整地している。なお、神明野古墳周濠部では赤褐色粘土で濠を埋め立てて、上記の整地を行なっている。整地下面で下層遺構、整地上面で上層遺構を検出した。

検出した主な遺構には、奈良時代以前の遺構として前方後円墳ＳＸ0249（神明野古墳）、奈良時代の下層遺構として掘立柱建物ＳＢ10050、その東西にとりつく掘立柱塀ＳＡ10048・10049・10051、掘立柱建物ＳＢ10034、奈良時代の上層遺構として基壇建物ＳＢ10000（大極殿後殿）、その東西にとりつく回廊ＳＣ0102・10010・10090・10100、大極殿ＳＢ9150とＳＢ10000をつなぐ軒廊ＳＣ9144、奈良時代以降の遺構として掘立柱建物ＳＢ10030・10009等がある。

1. 奈良時代以前の遺構

神明野古墳SX 0249　神明野古墳SX 0249については、すでに第3・6・12・73・113の5次にわたる調査で概形が明かになっている。今回の調査では、前方部及び西側周濠を検出した。調査区中央北の断ち割り部分では墳丘端部は地山を斜めに削り出し、その上に硬くつき固めた厚さ約40cmの小礫混り赤褐色粘質土をおき、さらに黄灰色粘土を葺石の裏込めとしている。葺石は裾の部分のみが残っており、基礎に人頭大の石を一列に並べ、その上に拳大の石を並べている。

周濠は最も深いところで葺石裾から約70cmをはかるが、やや起伏があり、断面は一様なU字形ではない。

発掘区東半は墳丘部にあたるが、奈良時代に地山面まで削平されている。発掘区西半は周濠部にあたる。周濠の埋め立てに際しては、墳丘の土を利用したらしく、大極殿後殿SB 10000中央部の断ち割りでは、葺石が斜めに落ち込んだ状況が検出された。

第73次調査で、墳丘東側のくびれ部に造り出しのあることが判明している。今回の調査でその規模を確認するために東へ長くトレンチを拡張したが、大正の保存工事の溝によって破壊されて確認できなかった。一方、墳丘西側には造り出しのないことが判明した。

2. 奈良時代の下層遺構

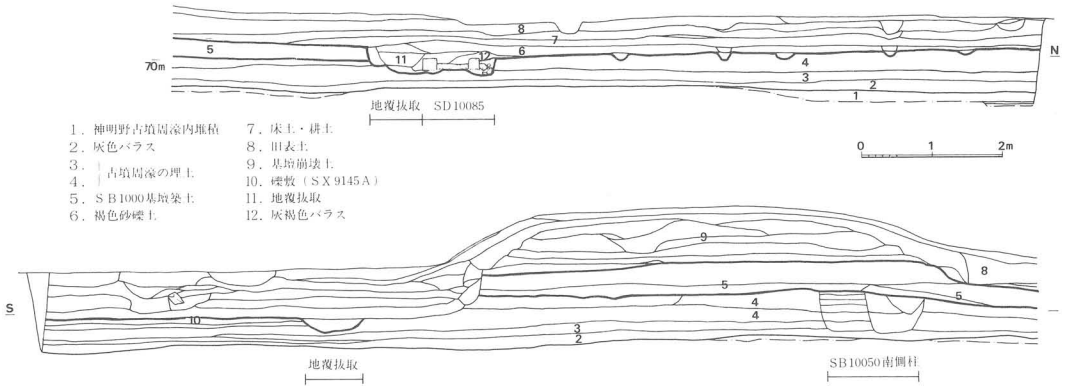
掘立柱建物SB 10050　桁行10間、梁間2間、切妻造の東西棟掘立柱建物である。桁行柱間10尺（ただし両端間のみ12尺）、梁行柱間10尺である。SB 10050検出面の上面には厚さ5cm程の瓦片を含む層があり、その上に大極殿後殿SB 10000の基壇を築成している。SB 10050の北側柱列はSB 10000の北雨落溝SD 10085と重複している。つまり、SB 10050の南北中軸線はSB 10000と一致するが、東西中軸線は若干北へずれている。

第113次調査で検出した大極殿下層の掘立柱建物SB 9410とSB 10050とは、11.8m（40尺）を隔て、SB 9140の東・西側柱列はそれぞれSB 10050の東・西妻柱列と柱筋がそろっている。

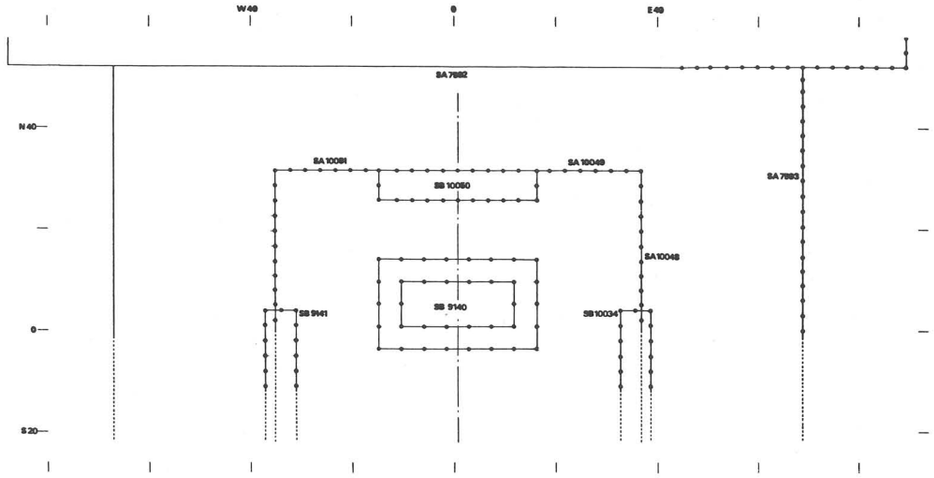
掘立柱塀SA 10048・10049・10051　SB 10050 東側では、SB 10050 の北側柱列にとりつく掘立柱塀SA 10049 がある。柱間10尺（SB 10050 とりつき部分のみ8尺）、東へ7間で南へ折れてSA 10048 となる。SA 10048 も柱間10尺で、10間分検出したが発掘区の南へさらに続いている。SB 10050の西側では、西へ続掘立柱塀SA 10051 を2間分検出した。おそらく東側と対称に鉤の手に折れる塀となるのであろう。

掘立柱建物SB 10034　SB 10048 南端で検出した2間分の掘立柱列である。柱間は3mで、南北棟の北妻と考えられる。この西端の柱位置と第113次で検出した掘立柱建物SB 9141 の北端の柱位置とは、SB 9140 の南北中軸線を軸として対称の位置にある。したがって、SB 10034・9141は桁行5間以上梁間2間の南北棟建物となる。SB 10034の棟通はSA 10048 より1m西へ寄っており、埋土の状況からSB 10034 の方が新しい。東端の柱抜取り穴から平城宮土器Ⅲの土師器杯が出土し、妻柱抜取り穴には凝灰岩片が混入している。

南北溝SD 10040　大極殿後殿SB 10000 の北雨落溝SD 10085の東端から北へのびる溝である。幅50cm・深さ20cm、断面半円形でSB 10000北側の整地土(黄褐色粘質土）下面において検出した。SC 10010 基壇内でこれに続く溝はなく東から西へ折れ曲っていたと考えられる。SD 10016またはSD 10085がその溝を踏襲したのであろう。内裏地区ではSD10040延長上に溝はなく、SA 10049との前後関係も不明である。

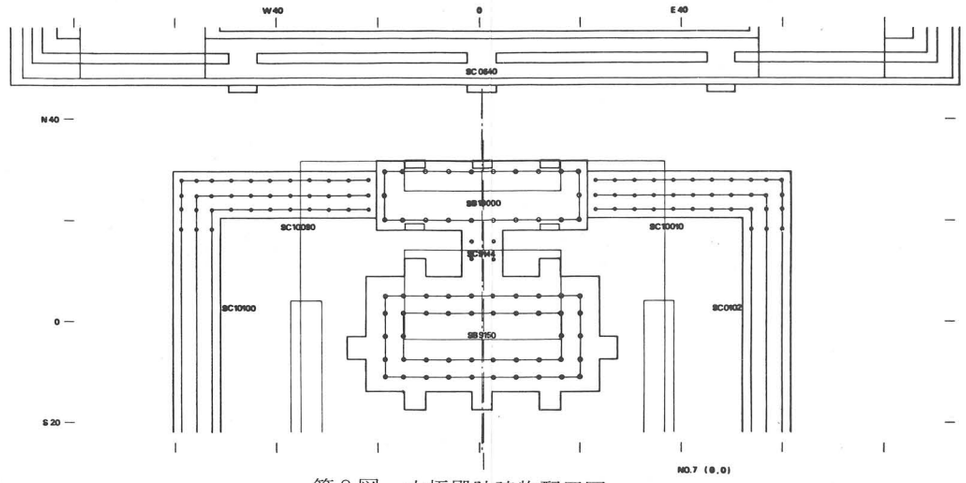


第5図　大極殿後殿断面図

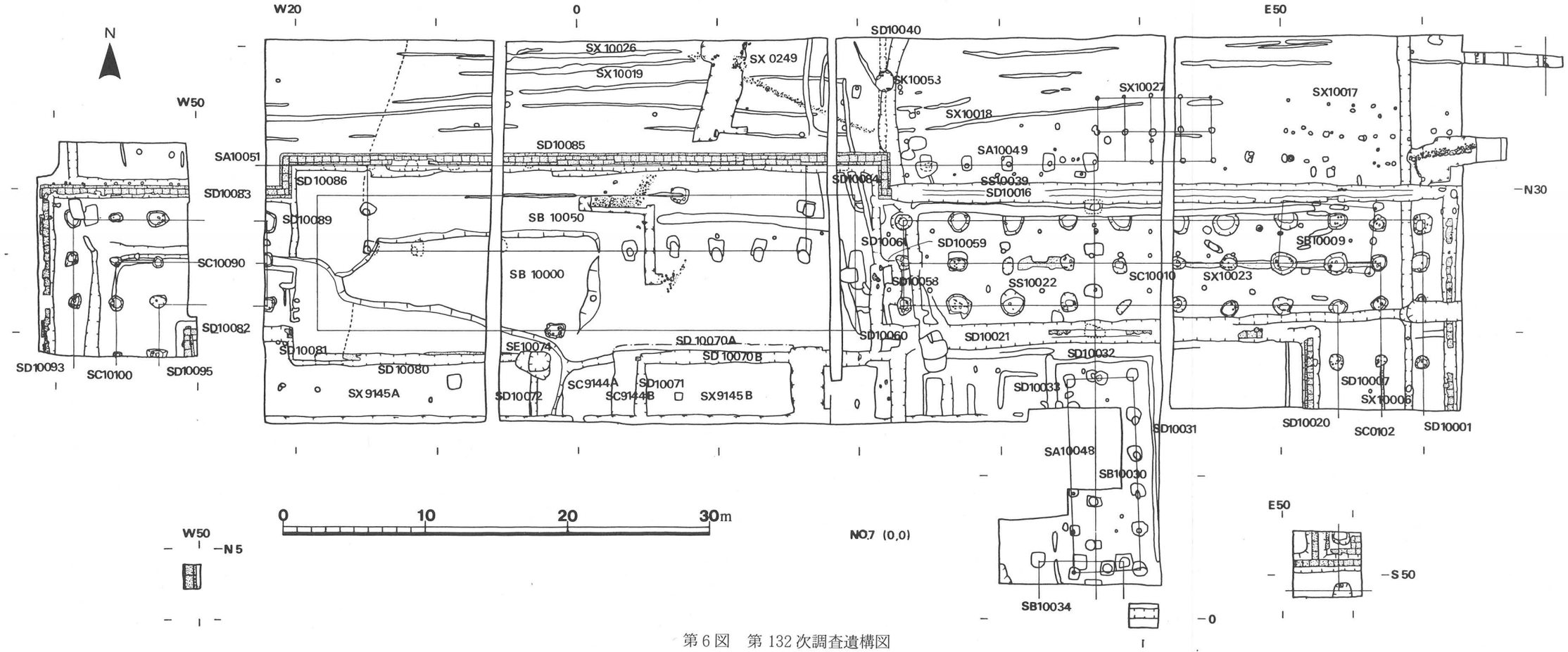


第７図　大極殿院下層建物配置図

ＳＢ９１４０の廂は南北二面については確認したが東西については未確認である。



第８図　大極殿院建物配置図



第６図　第 132 次調査遺構図

3. 奈良時代の上層遺構

大極殿後殿SB 10000　　基壇上部は削平が著しく、土壇として残っていた部分も上半部は近世の盛土であった。しかし、基壇北側の雨落溝SD 10084・10085・10086がほぼ完全に残っていること、基壇南・東・西側に基壇外装の地覆石抜取痕跡SD 10060・10061・10070B・10080・10081・10089があることから、基壇規模は東西41.75m（140尺）、南北13.7m（46尺）と判明した。基壇の築成は、整地土の上に直接基壇土を積み、掘込地業を行なっていない。基壇土は褐色粘質土と礫を含む砂質土との互層で、版築状を呈するが比較的粗い仕事である。基壇の外装は、地覆石抜取り痕跡に凝灰岩製束石・羽目石等の破片があったことから壇正積基壇と推定される。基壇南側の地覆石抜取り痕跡SD10080・10070Bは、軒廊SC 9144B（拡幅後）の地覆石抜取り痕跡SD10072・10071と一連なので、軒廊と後殿の基壇外装は一体と考えられる。また、基壇南の東半部では、SD 10070Bの北に40～50cmの幅で地覆石抜取り痕跡SD 10070Aが残り、これが当初の軒廊SC 9144Aに連なっていることから、軒廊の改修に際し、SB 10000の南側の基壇外装も改修したと考えられる。

基壇中央部の南北二ケ所に礎石の根石が残る。この間隔は東西9m、南北9.5mである。したがって、SB 10000は桁行9間、梁間2間、桁行柱間15尺（ただし両端間のみ12尺）、梁行柱間16尺の切妻造の建物に復原できる。梁行方向の柱筋は大極殿SB 9150と一致する。基壇の出は正・背面が2m（7尺）、側面が1.6m（5尺5寸）となる。

雨落溝（SD 10084・10085・10086）は基壇の北側のみにある。底石と両側石とからなる凝灰岩切石で作られている。整地土を削り込んで幅約1.2m、断面W字形の溝を掘り、中央の浅い部分に底石をおき、両側の深い部分に側石をおき、凝灰石小片を裏込めとして側石を固定している。底石は幅45cm、長さ60cm、厚さ9cm。側石はあまり一定しないが、長さ80cm前後、幅は外側石16cm、内側石20cm、厚さは25cm前後である。側石の上面は溝に向って斜めに削れており、とくに内側石で顕著である。溝の埋土は二層にわかれる。下層はSB 10000が存続中にその

北側を整地した時に落ち込んだ土（灰褐色バラス）で、上層はSB 10000 廃絶後の基壇崩壊土で瓦片を多数含む。なお、SD10086とSD 10085西端の底石には径6cmの盃状穴が数個づつある。

SB 10000の北側には中央と東・西の3ケ所に石階が設置されている。石階位置では、長さ4mにわたってSD 10085の内側石の幅が35cmに拡大し、溝幅が狭くなる。この3ケ所の石階位置は、軒廊SC 9144 Aおよび大極殿SB 9150の東西両石階の位置に一致する。中央石階附近から、石階に用いた三角形の凝灰岩製羽目石が出土した。これを参考にすると、基壇高4尺として石階は3級となり、基壇に約4尺入り込む。また、石階部分の外側石の外側に、凝灰岩の粉が幅10cmにわたって残る。内側石の張り出し部分に凝灰岩板石をのせ、橋としたのかもしれない。なお、基壇南側に石階の痕跡はない。

SB 10000南側には礫敷が敷設されている。礫敷は上・下2層ある。上層の礫敷（SX 9145 B）の礫は径5～15cm、下層（SX 9145 A）のは径1cm前後と小さい。軒廊SC 9144の西側ではSX 9145Bは削平されていた。SX 9145B上面には一面に瓦片が散乱している。一方、SB 10000北側にはSX 9145 A・Bに対応する礫敷はない。

軒廊SC 9144　大極殿SB 9140とSB 10000とをつなぐ軒廊には2時期ある。当初のSC 9144 Aは東西幅3.8m、南北長9.6m、やや粗雑な版築で築成する。SC 9144 Bは、これを拡幅し、幅8.2mとなる。凝灰岩混りの褐色粘質土で築成するが、版築は行なわない。第113次調査では、SC 9144基壇上に一対の礎石抜取り痕跡を検出しているが、今回の調査区内では検出できなかった。

大極殿院回廊SC0102・10010・10090・10100　SC 0102は第1次調査および本調査で検出した東回廊、SC10010はSB 10000の東側の北回廊、SC10090は西側の北回廊、SC 10100は西回廊である。回廊基壇両側の雨落溝によって、基壇規模は幅9.4m(31尺)、長さは、SC 10010・10090が40.2m（135尺）、SC 0102が78.6m（264尺）をはかる。基壇は整地土と地山とを削り出し、その上に盛土をほどこす。版築は行わない。基壇外装は雨落溝内側石を羽目石とし、上に

葛石をのせたと思われる。基壇上には礎石抜取り穴が三列に並ぶ。抜取り穴径は1～2mで根石を残すものが多い。抜き取った後、凝灰岩を混えた土で埋めている。SC0102の発掘区東南隅の礎石抜取り穴から平城宮土器Ⅳ～Ⅴの土師器皿が出土し、廃絶時期を示唆する。抜取り穴の間隔によって、桁行の柱間が3.9m(13尺)、梁行の柱間が3m(10尺)に復原できる。したがって、基壇の出は5尺5寸となる。中央柱列の抜取り穴をつないで幅50cm前後の溝(SX10007・10023・10059)内に凝灰岩粉末が残る。これを棟通り柱列の地覆石抜取り痕跡とすると、回廊は棟通りを壁または連子窓とする複廊と考えられる。SC10010上の西から4間目には幅1mの地覆石痕跡があり、扉口が設けられていたと考えられる。SC10010がSB10000にとりつく部分の南側2個の礎石抜取り穴にそって、コの字形の地覆石抜取り痕跡SD10058がある。回廊の内側に階段があり、回廊から直接大極殿後殿に昇ることができたらしい。

回廊の雨落溝SD10001・10016・10020・10021・10082・10083・10093・10095も凝灰岩切石製で、造り・寸法はSB10000の雨落溝と同じである。ただし、内側石はやや幅・厚さが大きく、幅は25cm、厚さは35cmで、回廊の羽目石を兼ねる。また、SD10083北側では、側石裏込めに径20～30cmの石をほぼ1m間隔に置いている。凝灰岩はSD10016・10021では大半が抜取られている。抜取りは旧耕土下面から切り込んでおり、比較的最近抜取ったのであろう。

SC0102・10010の基壇内外には足場穴SS10006・10022・10039がある。SS10022はSC10010の棟柱のやや北寄りと、南北両側柱の内寄りの三列に並ぶ。桁行柱間は4m前後だが、後殿きわでは3mとなる。梁行柱間は北側では1.8m、南側では2.4mで、桁行・梁間とも柱間寸法にばらつきがある。SS10039はSC10010基壇から北1.5mに4間分が残り、柱間は約3mである。

東西溝SX10018・10019・10026　SB10000および北回廊SC10010の北側には、幅20cm、深さ10cmの5条の東西溝が部分的に途切れながら蛇行している。このうち南の4本は、2本づつ平行して蛇行し、その間隔は1.5mである。

4. 奈良時代以降の遺構

掘立柱建物SB 10030　発掘区南端、SA 10048とかさなる位置で検出した。SB 10030は桁行5間、梁間2間、切妻造、南北棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行が9尺、梁間8尺。北で約2度西へ振れている。柱抜取り穴から凝灰岩製基壇外装材およびSB 9150・SB 10000所用と同形式の瓦が出土した。SD10031・10032・10033はSB 10030の東・北・西をめぐる雨落溝で、埋土に多数の瓦片を含む。

掘立柱建物SB 10009　SC 10010東端基壇上にある東西棟の掘立柱建物である。桁行3間、梁間2間、柱間寸法は桁行7尺、梁行7.5尺。北で約5度東へ振れている。柱掘形は一辺約60cmと小さい。

掘立柱建物SX 10017・10027　いずれも仮設的な掘立柱建物と考えられる。SX 10027は桁行4間、梁間2間、総柱の東西棟である。柱間寸法は7尺前後であるが一定しない。出土遺物がなく時期不明であるが、方位は振れておらずSC 10010と併存した可能性もある。SX 10017は梁間2間、柱間寸法7尺の東西棟であるが、桁行は不明である。北で約4度東へ振れている。柱掘形はない。中央部の柱穴から9世紀の黒色土器が出土した。

土壙SK 10053　SB10000東端北側にある。凝灰岩切石・瓦を側石に転用した径120cm、深さ50cmの円形の土壙である。大極殿後殿・回廊の廃絶後につくられた水溜であろう。

井戸SE 10074　SB 10000とSC9144のとりつき部分の西にある。一辺1.5m、深さ4.6mの井戸状土壙である。近世の井戸と考えられる。

遺　物

遺物には瓦・土器・埴輪・凝灰岩切石片がある。

瓦　出土した軒瓦の内訳は別表のとおりである。6225型式の軒丸瓦が62%、6663型式の軒平瓦が65%を占め、この両者が組み合って大極殿後殿と回廊の軒瓦の主体をなしていたことがわかる。これは大極殿所用瓦とも一致する。そのほか、6225－L型式軒丸瓦2点、鬼瓦2点、隅木蓋瓦1点、面戸瓦6点が出土し

ている。

土器　大極殿院の性格を反映して土器の出土はきわめて少ない。SB 10000北側の整地土、SX 10017・10027の柱穴、南側の地覆石抜取り、礫敷SX 9145B上面等から出土している。土師器は30点、須恵器は35点ある。時期の判明するのは12点で、土師器は平城宮土器Ⅲが1点、Ⅳ～Ⅴが2点、Ⅶが6点、須恵器はⅤが1点、Ⅳが2点、この他九世紀の黒色土器1点がある。

埴輪　埴輪は神明野古墳SX 0249の周濠堆積および埋土中から多く出土した。26点ありすべて円筒埴輪である。

凝灰岩切石片　SB 10000南側の地覆抜取りおよび北雨落溝附近を中心に多数出土した。

まとめ

今回の調査の結果、第1次・113次の調査結果とあわせて、推定第2次大極殿院の規模・形式が明らかになるとともに、下層掘立柱建物が一院を形成することが判明した。

下層掘立柱建物　建物の配置は第7図のようになる。SB 9140を正殿、SB 10050を後殿とし、SB 10050北側柱にとりつく塀SA 10048・10049・10051が両建物を囲む（これを仮に大極殿院下層建物と呼ぶ)。正殿と後殿とは東西両端の柱筋をそろえる。両建物の棟通りの間隔は80尺、塀の東西長は240尺である。SB 9141・10034は脇殿の位置にあるが、南北塀SA 10048より時期が降る。南北塀の一部を壊して脇殿を造ったのかもしれない。大極殿院下層建物の外郭を画するものとして、内裏の南を画する塀SA 7592とそれにとりつくSA 7593とがある。しかし、この柱筋は大極殿院下層建物の柱筋とは一致し

平城宮瓦編年	軒丸瓦（点数）	軒平瓦（点数）
Ⅰ期	6279 A（1） 6284 C（1）	6643 A（1）
Ⅱ期	6225（61） 6301 C（1） 6308（3） 6311（10） 6313（1）	6663（72） 6664（13） 6681 D（1） 6685 A（1）
Ⅲ期	6133（11） 6134 A（2） 6282（4）	6691 A（4） 6694 A（1） 6721（4） 6732 A（3）
Ⅳ期		6725 C（1） 6726 E（1） 6761 A（1） 6801 A（5）
未確定	6296（3）	6704 A（2）
計	（98）	（110）

第132次調査　出土軒瓦一覧

ない。大極殿院下層建物の造営尺は1尺＝ 29.5～6㎝であるが、脇殿はほぼ1尺＝30㎝である。

上層基壇建物　建物の配置は第8図のようになる。下層建物よりやや南にずれて大極殿SB 9150、大極殿後殿SB 10000があり、後殿にとりつく複廊SC 10010・10090・10100・0102がめぐる。複廊の東西長は410尺、南北長は296尺である。SB 9150とSB 10000とは下層建物同様、東西両端の柱筋を等しくする。SB 9150の軸線は、東西軸はほぼ平城方位に一致するが、南北軸はSD 10020で測ると12分ほど北へ振れる。造営尺は1尺＝ 29.7～8㎝である。

造営時期　SB 10034の柱板取り穴から平城宮土器Ⅲの土器と凝灰岩片とが出土した。SB 10034の廃絶が天平末年から天平勝宝以降であり、それが凝灰岩を用いた建物の造営または廃絶に併行することを示す。SB 10034は大極殿院下層建物より造営が遅れる。SB 10034と大極殿院とは、SB 10034とSB 9145との距離がやや近いという難点があるが、併存の可能性がないわけではない。また、大極殿院のうちSB 9150は基壇拡張の可能性がある。SB 10000についてもSC 9144の拡張にともなって基壇外装を改作している可能性が大きい。以上から次のように時代区分できる。

A₁期　大極殿院下層建物の時期。その造営期は内裏南限の掘立柱塀SA 7592、それにとりつく南北塀SA 7593の造営に併行し、和銅から養老年間にあたる。

A₂期　脇殿SB 9141・10034が造られた時期。A₁以降で天平年間までの間。

B期　大極殿院の時期。平城宮瓦編年第Ⅱ期以降に造営され、奈良時代後期から末期まで存続する。造営の時期はSB 10034廃絶後とすれば天平勝宝年間以降、併存するならばそれ以前となる。SB 10034は大極殿院造営工事の末期、または改作の頃に廃絶することになる。

C期　大極殿院廃絶後で、SB 9152・10009が造られた時期。SB 10030はB期後半からC期にかけて存在する。

今回の調査によって、以上のような大極殿院下属建物と大極殿院との構成・規模・変遷などが明らかになった。しかし、その造営の絶対年代の確定、大極殿院南側の様相の究明など、今後に残された課題も少なくない。